

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 9 月 12 日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370825

研究課題名(和文) 儀礼から見た12世紀ユーラシア東方の国際秩序

研究課題名(英文) Ritual and International Order in Eastern Eurasia during the Twelfth Century

研究代表者

古松 崇志 (Furumatsu, Takashi)

岡山大学・社会文化科学研究科・准教授

研究者番号：90314278

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：12世紀前半にマンチュリアから一気に勃興した女真族がうち立てた金国は、契丹・北宋をあいっいで滅ぼしてマンチュリア・内モンゴル東部・華北を領有し、13世紀初めのチンギス・カン率いるモンゴルの統合に至るまでユーラシア東方に覇を唱えた。本研究は、金と南宋・高麗・西夏などの諸国とのあいだで毎年正月と聖節(皇帝の誕生日)など定期的に派遣された使節団が金および各国の朝廷で参加する各種の儀礼を詳細に検討することをつうじて、この時代の金を中心とするユーラシア東方の国際秩序の特質を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：In the early twelfth century the Jurchen people, who had originally inhabited Manchuria, established the Jin dynasty and overcame the Khitan and the Northern Song. Consequently, the Jin dynasty held sway over Eastern Eurasia, including Manchuria, southeast Mongolia, and northern China, for about eighty years until the Mongol unification of Eurasia. This study presents a detailed examination of the rites performed annually by diplomatic missions exchanged between the Jin and the Southern Song, Koryo, and Xixia (Tangut) on New Year's day and the emperor's birthday in the Jin court and the courts of each country, and it sheds light on distinctive features of the international order in Eastern Eurasia under the hegemony of the Jin dynasty.

研究分野：東洋史

キーワード：金 儀礼 都城 外交儀礼 外交使節 賓礼 多国体制

1. 研究開始当初の背景

これまで研究代表者は、唐の解体からモンゴルの統合までの300年間にわたってユーラシア東方が多極化した時代に、各国が相互にいかなる関係を取り結んだのか、多国の共存はいかにして維持されたのかという問題について、研究を進めてきた。とくに近年は、10世紀から12世紀初めにかけての契丹を中心とした国際関係の包括的な研究に取り組んできた。そして、11世紀初頭の澶淵の盟締結によって成立した契丹・北宋二国間の対等な平和共存関係を支えるしくみとそのしくみにもとづきユーラシア東方で維持された複数王朝が共存する国際秩序の双方を包み込んで「澶淵体制」と呼ぶことを提唱し、契丹・北宋両国間の相互交渉や意思伝達のしくみについて、国境・外交文書・外交儀礼などを具体的な題材として明らかにしてきた。引き続き着手する本研究では、新たにマンチュリアから勃興して契丹・北宋を滅ぼした金(女真)を中心とする、12世紀前半から13世紀初めにかけてのユーラシア東方の国際関係について取り上げ、各国間で派遣された使節団が参加する儀礼に焦点を当てて研究を進めていく。

金を中心とするユーラシア東方の国際関係については、古典的な研究によって、金と周辺国との間の政治・経済的な関係に関する基礎的な史実が明らかにされている。しかしながら、近年の金代にかんする歴史研究は、前代の契丹史(遼代史)研究の活況とは対照的に、考古学の発見の少なさも史料不足が覆いがたいことから依然として低調な状況にある。また、国際関係にかんする研究についても、いくつかの例外をのぞいて依然手薄である。とくに本研究がとりあげる金を中心とする12世紀ユーラシア東方の儀礼の研究は、唐代や北宋に比べれば大きく立ち遅れている。前代の契丹・北宋間の使節団(国信使)がおこなう儀礼については研究代表者がこれまでに詳細な研究をおこない、儀礼が名分上対等な両国関係を象徴して両国の友好関係を維持・更新する機能を持ったこと、北宋国都の宮廷および遊牧王朝たる契丹朝廷の幕営地における儀礼がおこなわれる空間の構造などを明らかにしてきた。申請者はこうした自身の契丹・北宋間の儀礼研究の成果をふまえつつ、如上の研究史上の空白を埋めるために本研究に着手するに至った。

2. 研究の目的

金は12世紀はじめの勃興から度重なる戦闘を経て、比較的短い間に契丹・北宋を滅ぼし、さらに南宋・高麗・西夏といった周辺諸国を屈服させ、ユーラシア東方に覇を唱えた。このように金の覇権は軍事力を背景に確立したが、ユーラシア東方における金を中心とする国際秩序は、その後いかにして維持されたのであろうか。そしてその国際秩序は、研究代表者がこれまで論じてきた11~12世紀

の契丹・北宋関係を柱とする国際秩序に比して、どのように変化したのか。そのいっぽうで変わらなかった部分はなかったのか。前の時代からの連続性と変容の双方を見定めていく必要がある。本研究は、当時の国際関係にかかわる先学の研究成果を踏まえつつ、従来研究が手薄だった儀礼を題材にしてこうした問題の解明に取り組むものである。

3. 研究の方法

金と南宋・高麗・西夏の各国とのあいだでは、元日や聖節(皇帝の誕生日)を祝賀するための使節団が毎年派遣されるのみならず、君主の即位や死去といった慶弔の行事のさいにも使節団が派遣され、密接な交流が維持され続けた。本研究では、金の朝廷で南宋・高麗・西夏などの周辺諸国の使節団が到来しておこなわれる儀礼や、金から派遣された使節団が各国の朝廷で参加する儀礼を取り上げる。元日・聖節の祝賀にかかわる儀礼としては、君主(皇帝・国王)と外国使節が会見する入見・朝辞儀礼と、皇帝の臨席のもと百官や外国使節が集まって挙行される元日や聖節を祝賀する朝賀(上寿)儀礼、使節団を招いて皇帝が主催する宴会儀礼とがあった。本研究は外交儀礼の研究で通常対象となる入見・朝辞儀礼のみならず、朝賀(上寿)儀礼や宴会儀礼もあわせて検討をくわえ、金および周辺国の儀礼を実証的に読み解くとともに、使者の参加する儀礼に現れる王朝間関係の特質を比較・検討し、金を中心とするユーラシア東方の国際秩序の構造を礼制の側面より明らかにしていく。

4. 研究成果

(1)以上の金国朝廷でおこなわれた正旦・聖節の儀礼の研究については、次のような成果が得られた。

正旦・聖節におこなわれる諸儀礼はすべて漢儀であり、阿骨打による金国建国当初にはなかった儀礼であった。二代目の太宗(呉乞買)即位以後に、版図の拡大と北宋・西夏・高麗・齊との外交関係の確立にともなって外国使節を受け入れる必要が生じ、契丹(遼)の制度を模範にして儀礼が制定された。とくに注目すべきなのは、本来ならば必ずしも外国使節の有無とかかわりなく行われるはずの朝賀・上寿儀礼についても、太宗朝の外国使節の受け入れが契機となって行われるようになったことである。外国使節の朝賀・宴会・入見・朝辞儀がひとまとめに明文として制定したことを文献史料ではっきりと確認できるのは、第三代の熙宗(合剌、亶)時代からであり、朝賀儀礼の挙行に外国使節の存在が不可欠であったことがうかがわれる。このころには齊・高麗・西夏の三国使節がともに参加するという儀礼の形式が確立しており、皇統和議(1142年)以後は南宋が齊に取って代わるものの、13世紀初めに至るまで一貫して三国の枠組が維持された。

儀礼空間については、太宗時代に外国使節受け入れをひとつの契機として、御寨（現在の黒龍江省哈爾濱市阿城区）と呼ばれる根拠地に初めて正殿たる乾元殿を建設し、そこで外国使節が参加する儀礼を挙行した。熙宗時代には御寨を発展させて、上京城を造営し、王朝国家としての体裁を整えていった。その後、12世紀半ばに海陵王（迪古乃、亮）が中都（現在の北京市）に遷都すると、王朝の重心は大きく南に移り、中国王朝の制度を大幅に導入した。中都において挙行された正旦・聖節の諸儀礼の内容にかんしては、世宗（烏祿、雍）の時代に定められた儀注（「人使辞見儀」「元日称賀儀」「聖節称賀儀」「曲宴儀」）が『大金集礼』や『金史』礼志といった典籍文献に記載されている。これらの儀注について、細部に至る綿密な考証をおこない、それぞれの儀礼の進行次第を詳細に検討した。この作業をつうじて、入見・朝辞儀礼の基本構造については、国ごとに別々に儀礼を挙行した契丹の制度を踏襲するいっぽうで、それを三国で連続して挙行した点に金代の儀礼の特徴があることが判明した。またこの時代に南宋からの使節が記した記録に儀礼や儀礼空間たる宮殿に関する細かな描写が残されている。そうした記録を活用し、その内容を分析することをつうじ、巨大かつ贅を尽くした中都の宮殿（正殿の大安殿やその後ろの仁政殿）において、数百人規模の三国使節がともに儀礼に参加することで、多国体制下における天下の主として、金国皇帝の権威を荘厳誇示し、三国使節団を含めた天下君臣の融和を演出したと考えられることを論じた。

ただし、12世紀のユーラシア東方情勢の大局に目を転ずると、契丹が滅亡した後、金にとって不倶戴天の敵だったカラ=キタイ（西遼）が中央アジアで強盛を誇り、モンゴル高原への影響力を行使したらしいこともあって、金は北方のモンゴル高原経営に消極的にならざるを得ず、大興安嶺の東側で北方牧民集団にたいする防衛線を引かざるを得なかった。これは、前代の契丹（遼）がモンゴル高原経営に積極的にとりくみ、モンゴル高原中央部に城塞や長城などを建設し、草原ルートをつうじてウイグルやカラ=ハン朝など西方諸国とのあいだでさかんに通交したのとは好対照をなす。本研究でとりあげた毎年の正旦・聖節の儀礼に参加する外国使節は、南宋・高麗・西夏の三国に固定・限定されており、ある意味でユーラシア東方における金の覇権の限界を示す儀礼だったと評価することもできるだろう。

以上の内容については、すでに学会発表をおこない、今後論考として発表する予定である。

（2）本研究の前提となる前代の11世紀～12世紀初めにおける契丹と北宋の間で往還した国信使の儀礼をめぐる諸問題について論じた論考を発表した。本論考では、両国の対等性を示す儀礼の基本的な構造を明らか

にした。また、北宋朝廷での儀礼にみられる契丹側使節の契丹服の着用、契丹式拝礼の採用、契丹語の使用、帯刀の許可などに、軍事的に優勢だった契丹に対する北宋の譲歩が見られることを指摘し、完全に対等な儀礼とは言えないことを明らかにした。さらに契丹朝廷で儀礼がおこなわれた空間の変遷についても考察し、澶淵の盟締結当初は、新造の中京など都城で儀礼がおこなわれることが多かったが、その後契丹の冬营地たる冬捺鉢の置かれた広平淀に受礼場所が移り、殿に見立てて回廊もめぐらした帳幕で儀礼がおこなわれたことを明らかにした。帳幕での儀礼挙行は建国当初の金にも受け継がれていったことにも言及した。

（3）本研究と関連するテーマとして、10～13世紀の多極化時代の各国における天下観についての研究に着手し、契丹と北宋の天下観にかんする言説を石刻史料も含めた漢語文献史料より収集して分析を進めた。この研究内容について、学会発表をおこなった。

（4）本研究の舞台である東北アジアの考古・歴史研究は戦前に日本人研究者によって本格的に着手されたが、そのなかでも最も重要な研究者の一人で、契丹の歴史考古学研究のパイオニアであった鳥居龍蔵の契丹研究にかんする論考を発表した。各方面での多彩な成果を挙げたことから注目を集めている鳥居龍蔵だが、彼が晩年傾注した契丹研究については初の専論である。調査・研究の推移を詳細に紹介するとともに、近年の契丹考古学の新発見や研究の進展をふまえて、あらためて鳥居龍蔵の研究の意義を再考した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 4件)

古松崇志「書評 藤原崇人著『契丹仏教史の研究』」東洋史研究、査読有、75巻3号、2016、197-209

古松崇志「鳥居龍蔵の契丹研究 慶陵の調査・研究を中心に」鳥居龍蔵研究、査読無、3号、2015、13-48

古松崇志「契丹とユーラシア東方の国際秩序」歴史と地理 世界史の研究、査読無、244号、2015、52-55

古松崇志「契丹・宋間の国信使と儀礼」東洋史研究、査読有、73巻2号、2014、63-100、

〔学会発表〕(計 2件)

古松崇志「金国における正旦・聖節の儀礼」2016年度広島史学研究会大会、2016年10月30日、広島大学（広島県東広島市）

古松崇志「契丹の天下観 11世紀における宋との関係を中心に」富山大学人文学部東アジア研究プロジェクト共同シンポジウム「分裂する中国 二つの南北朝」、2015年11月28日、富山大学（富山県富山市）

〔図書〕(計 1件)

古松崇志他、昭和堂、概説中国史、下巻、

2016、331

6 . 研究組織

(1)研究代表者

古松 崇志 (FURUMATSU, Takashi)

岡山大学・社会文化科学研究科・准教授

研究者番号 : 90314278